

令和5年10月25日

佐々木 朗

「難聴交流教室」に参加して

- 1 日時 令和5年10月25日(水)
18:30~20:30
- 2 場所 亀田交流プラザ
- 3 主催者 函館中途失調者・難聴者協会
- 4 参加者 13名 他スタッフ
- 5 第1回テーマ 筆談での会話実践
- 6 内容
 - (1) 筆談のポイント
 - (2) 隣の方との筆談体験
 - (3) グループでの筆談
 - (4) まとめ

7 感想

北海道新聞でこの催しを知り、メールで申し込んだ。おそらくこの手の勉強会はそんなに混雑するほどではないと思ったが、その通りで、アットホームな雰囲気の中で勉強をすることができた。

この話題に入る前段の話だが、亀田交流プラザには、1階に図書コーナーがあり、結構な数の机と椅子があった。8割ぐらいが午後6時過ぎでも埋まっていた。誰が使っていたか。

ほとんどが私服・制服の高校生であった。数II Bなんて今でもあるんだと思いつつ、数学や英語の勉強を真剣にしている姿を目にした。若者が勉強している姿は、様になる。そして、美しいと感じた。自分も高2までは、無線に明け暮れていたが、高3にな

耳の間こえない・聞こえにくい人も
聞こえる人も 一緒に交流しましょう！
参加無料

『難聴交流教室』

主催：函館中途失調者・難聴者協会
https://hakodatenancho.com

QRコード

≪1回目≫「筆談での会話実践」～筆談入門ガイド～
効率的な筆談方法で、スムーズなコミュニケーションを！
【日程】10月25日(水) 18時30分～20時30分
※説明時等、音声認識アプリによる文字情報支援あり

≪2回目≫「音声認識アプリ」を利用した会話実践
【日程】11月8日(水) 18時30分～20時30分
※スマホ等を持っていない方も参加可能です。
※スマホ等を持参の方は、できるだけ事前にアプリをインストール
してご来場ください。(アプリ名「UDトーク」で検索)
※「UDトーク」は無料で使用できるアプリです。
※説明時等、音声認識アプリによる文字情報支援あり

≪3回目≫「手話」を探り入れてみましょう
—会話・コミュニケーションの幅が広がります—
【日程】11月15日(水) 18時30分～20時30分
※説明時等、音声認識アプリによる文字情報支援あり

≪4回目≫「要約筆記」文字通訳を活用
【日程】11月29日(水) 18時30分～20時30分
※要約筆記(文字通訳)付きで進めます。

【会場】函館市亀田交流プラザ・大会議室1(函館市美原)
※途中からの参加も可能です。お気軽にお申し込み、お問合せください。

【申込み・問合せ先】函館中途失調者・難聴者協会事務局
FAX: 050-3737-4593 メール: hakodatenancyo@gmail.com

QRコード

って、教育大に行くと決めて(周りの多くが行くというのにつられてというのもあるが)、結構勉強した。そうしたら、成績はぐんぐん上がった。上がったといえども、早稲田や北大などを目指す人たちには到底かなわなかったが。だから、今でも思っている。勉強をすれば、成績があがる。そして公務員になれて、まあ、お金に限って言えば、飲めず食えずの生活とは無縁に過ごすことができた。だから、10代、20代で全く勉強をしない人は、もったいないし、稼ぎの面からいっても、全部が全部とは言わないが、そこそこになってしまう現実がある。やっぱり勉強は大切だし、勉強をして知識をたくさん

身に付けていれば、問題に直面した時に、それらの知識を使って、知恵を生み出すことができるのである。

今、60を過ぎてても、あっちこっちに顔を出して、社会を学んでいるのも、今こうやってまとめを書いているのも、ある意味勉強なのだと思っている。

3階の大会議室が本日の会場である。最初の失敗をしてしまった。会場に入って、スタッフらしい方に、「受付はどちらですか。」と尋ねると、「？」のような表情をしている。すぐに気を利かせた人が、ホワイトボードを持ってきて、私の言ったことを書いてくれた。声をかけたスタッフの方は、「もう少しばかりお待ちください。」とはっきり言った。私は、耳が不自由な方に、それとは全く気付かず、普通に話しかけたのである。その方は、普通に話せた。耳が聞こえないと話せない。という先入観があったが、中途失調だと、流ちょうな日本語をしゃべることができることを今更ながら気づいた。

無事受付を終え、会が始まった。スクリーンが2枚あって、右のスクリーンには、説明のパワーポイント、そして左のスクリーンには、「UDトーク」という音声認識ソフトをつかった説明者の日本語表示がされていた。ゆっくり話すと、ほとんど誤字なく、表示されていた。もちろんたまには、誤変換もあった

が。

耳が聞こえないときのコミュニケーションはどうしたらいいか。身振り手振り、口元を読む、手話などが考えられる。身振り手振りは誤解が生じることがある。口元を読むのは、点はわかっても線や面になりづらい。手話は、お互いがわからないと成り立たない。

ということで、筆談だと確実性がある。日本の識字率は99%。字を読み書きできるのが当たり前だと思うが、それが、ままたまならない国も結構あるということだ。手話の原則は、同じ言語を使っているということである。フランス語しか話さないフランス品とは、筆談はできないということだ。

筆談の良さは、聞こえの程度にかかわらず、みんなが会話の輪の中にはいることができるということだ。はっきり聞こえない。話が半分しかわからないなどということがなく、内容を確実に伝えることができる

入会のご案内

《会員種別》

『正会員』
道南地域の「聞こえない・聞こえにくい」方
(聞こえの程度、手帳所持の有無は不問)

『賛助会員』
・会の趣旨に賛同いただける健聴者
・地域外の「聞こえない・聞こえにくい」方

＜問い合わせ先＞
函館中途失聴者・難聴者協会(事務局)

FAX専用番号: 050-3737-4593
メール: hakodatenancyo@gmail.com

ホームページ公開中!
各種イベントや、邦画字幕付き情報等
「函館 難聴者」で検索して下さい。
<https://www.hakodatenancho.com/>

覚えて・使ってください『耳マーク』 

聴覚障害者が身の周りの物に着けて使用したり、公共施設・病院・企業等が「聞こえない・聞こえにくい」方へサポートすることを示すマークとしても利用されています。マークの掲示があり、サポートの意思が示されていることで、聞こえない・聞こえにくい側も筆談等の依頼がしやすくなります。

耳の「聞こえ」で
悩んでいませんか?

- 「聞こえない」
「聞こえにくい」方へ -

耳が不自由なことや
サポートの用意があることを示す
【耳マーク】



・お手数ですが筆記してください。
・口元を見せてお話ししてください。
・呼ばれても聞こえません。
手で合図して下さい

函館中途失聴者・難聴者協会
略称: 函館中失協(ちゅうしつぎょう)

ということである。聞き返しもなく済むということも挙げられた。直接目の前で書くため、相手の表情も確認できるのもよい。

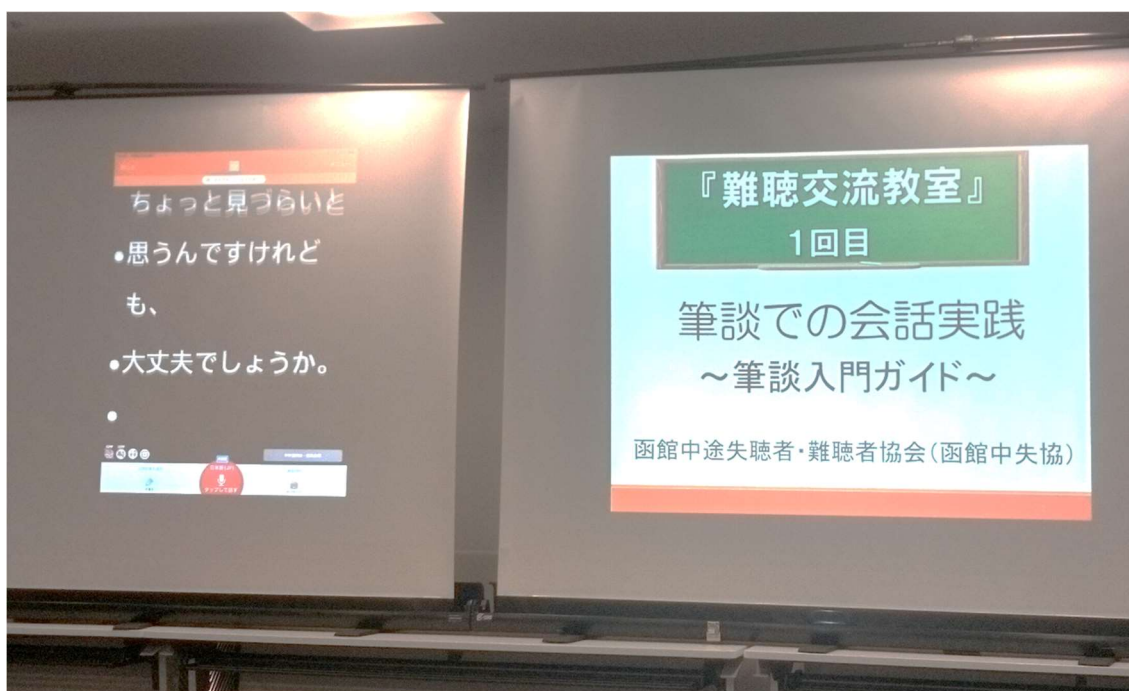
留意点としては、読みやすい字で大きめに。余裕があれば丁寧に。走り書きは避ける。(怒っているようにとられることもあるそうだ。)それと、必ず横書き、縦書きだと腕でかくしてしまうことにもなるそうだ。適度に漢字を使うことも読みやすさの秘訣である。言葉は丁寧すぎる、敬語を使いすぎなくても大丈夫ということ。数字は1, 2, 3の数字。日時は具体的、2時間後はNG, 午後1時という具合。

説明が終わった後は、筆談の練習。ホワイトボードとペン。そして布で作ったイレーサーが渡された。マイホワイトボードを持っている方も何人かいた。そして、右手だけに手袋という方もいた。それも親指と人差し指は、途中で切っており、指がでていた。これがなんであるかすぐわかった。そう、イレーサーである。いちいち布やティッシュを持ってこなくていい。その場で、自分の手

でこすって消してしまえばいいということである。聞くと、選択して何回も使うそうである。それでも手袋はだんだん落ちない汚れが付いてくるそうである。

隣の女性の方と自己紹介を兼ねたコミュニケーションを行った。ルールはもちろん「しゃべるのなし」あとからわかったが、その方は、片方だけに耳がほとんど聞こえないということであったが、もう片方の耳はだいぶ聞こえるということだった。休み時間には普通にお話をする事ができた。筆談で、自己紹介や彼女の障害のことなど、自分も社会福祉に興味を持っていることなどを交流することができた。時間はあっという間に過ぎていった。

片方の聴力のみで一番困ることは、音の方向がわからないということである。自転車が近づいてきても、後ろからなのか前からなのかわからない。物を落としても、落としたところを見ていなければとても探しづらい。テレビは、字幕がとても重宝する。部屋のチャイムは大きめにしている。聞こえ



ない耳のほうでささやかれると、聞き取れない。など、たくさんの経験談を聞いた。

休憩の後は、今度はグループでも筆談。私は4名のグループに入った。テーマは趣味や好きなスポーツ、テレビや映画、そのほか何でもということだった。大きな模造紙が長机

向かい合わせた中央に置かれ、それぞれ、自分の方向から、書いていった。テレビでは、障害がテーマのテレビやネット番組などをよく見るというあたりで盛り上がった。最近も、障害をテーマにしたテレビ番組もあり、社会のノーマライゼーション化に一役買っているのかなあと思った。

おしゃべりなしの30分間ほどであったが、しっかりコミュニケーションはできたと思う。言葉はなかったけれど、相手の表情やしぐさでも、相当量の情報をつたえることになることを改めて認識することができた。沈黙の30分が終わった後の若干の普通のおしゃべりも楽しくすることができた。

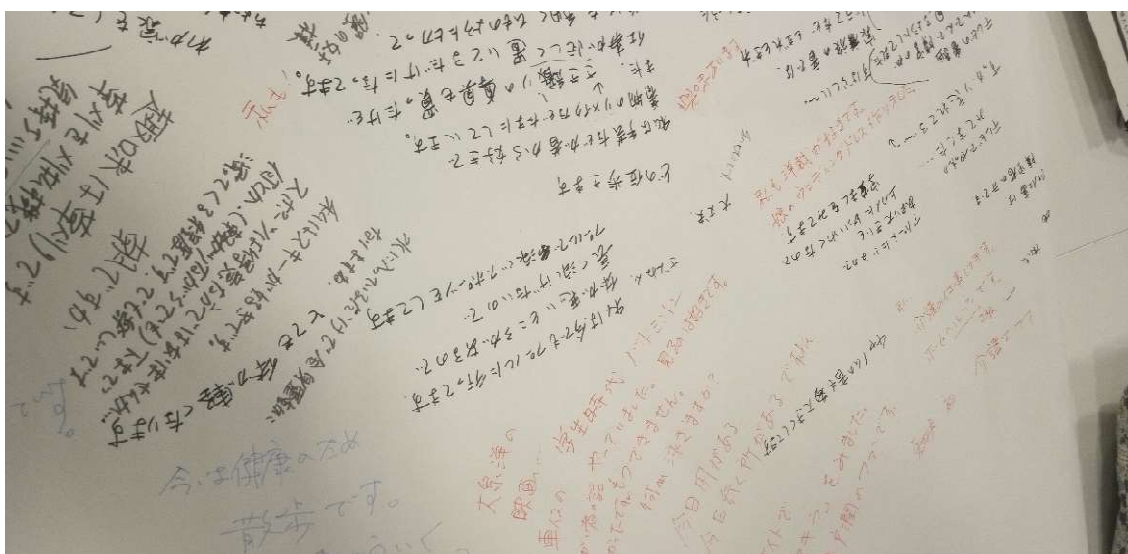
最後のまとめでは、筆談の共有で大切なこととして、複数で会話するときその中に一人でも聞こえない人がいる時は、筆談を使うこと。相手の筆談は最後まで読むこと。

短い言葉でのキャッチボールも良しとすること、書き終わったときそれが相手に伝わっているか表情を確認すること。ホワイトボードに書くときは、みんなに見えるようにすること。

あつという間の2時間だった。机と椅子を片付けるのを手伝って会場を後にした。

耳が聞こえない人は、目が見えない人と違って、周りから見ても、全くわからない。だから、声をかけた時の反応が少し違うことで、初めて気づくというのが初めてそのような人に会った時に遭遇することである。それは、私の最初の失敗もそうであるが、避けようがないことであり、その後、どう対応していくかが大切であろう。

資料にもあったが、ある日突然耳が聞こえなくなったら、また、毎日どんどん聞こえづらくなってきたら、どういうことになるのか、どういう精神状態になるのか。想像するしかないが、相当の落ち込み、挫折感、失望感があったことと思う。それでも人って強いものなのだろうか。それを乗り越え、特に最近のICT機器を有効に使いながら、上手にコミュニケーションを取り、社会の中で生きている。



耳は聞こえないより聞こえたほうがいいに決まっている。目は見えないより、見えたほうがいいに決まっている。足は車いすを使うより、自分の足で歩いて、走れたほうがいいに決まっている。でも、病気によって、事故によって、体の一部が障害を持つことは誰にでも可能性がある。一方、人間の心は、目が見えて、耳が聞こえて、足が丈夫であれば、強いのかといえば、全くそういうことは言えない。もしかしたら、苦境を乗り越えてきた障害のある方のほうが、メンタルは強いかもしれない。

私など、多少 ADHD っ気はあるものの一

応五体満足の身。学べることは学び、社会のノーマライゼーション化に向けて、自分ができることはやり、また、助けが欲しいときは、「教えて」、「手伝って」と我慢せずいうこともまた大切なのかなと思う。

障害のあるなしも、言葉の違いも、文化の違いもあるが、みんな人間。支えあって、思いやりを持ち合って、優しさを表現しあって、笑顔でのコミュニケーションを大切に、みんなが生まれてきてよかった、この街に住んでよかったといえるような社会にしていくことが大切だと、感じた。

2023年10月25日